

巻頭言

心理臨床家として「今」を生きる

高橋靖恵

大学院博士後期課程の修了は、どのように表現されるのだろうか。学生諸氏が就職活動をする際に、誰でも一度は、問い合わせをしたくなる事柄である。「博士後期課程 研究指導認定満期退学」あるいは、「博士後期課程 博士号取得 修了」と本研究科に関しては記載されている。私は、2024年度末で、「定年退職」を迎える。それはどのような心情になるのであろうか。何かを終えるということは、新しい始まりの地点ともいえる。それは、修士課程修了生、博士後期課程の学びを終える諸氏にむけてだけではなく、私自身の決意でもある。

心理臨床家として「今」を生きるというのは、これまでの伝統を受け継ぎ、独自の発見を世に送り出すことだと考える。

私は着任して4年目の2013年、この巻頭言を「心理臨床の心を育てる」として、当センターに長らく勤務された角野善宏教授のご退職を思いながらまとめた。今回執筆にあたり、あらためて振り返ってみた。河合隼雄名誉教授の言葉を引用しながら、心理臨床の教育についてふれた文章であった。

河合(2001)では、スーパーヴィジョンの書籍の序文で、次のように述べている。「臨床心理士の仕事はすべてをマニュアル化できない。すべてマニュアル通りにすればいいのであれば、それを「監督」あるいは「管理」する人がいればいい。しかし、極端に言えばクライアントは一人ひとり異なるのであり、同じ事例というのはいない」(原文のまま表記)。

だからこそ、心理臨床家として今を生きるために、常に学び続ける姿勢を持つことが大切と考えている。それは今も、私の信条として変わらない。事例発表を取り上げても、院生をはじめとする臨床心理士の育成にかかわる指導者自身が、昔取った杵柄だけで、うかつなコメントをすることはできない。

私たちのところは、その時代に生きて、闘い、そして傷ついている。セラピストは、それを自らに向けた言葉にでき、凌いでいくことができる立場にある。クライアントとして眼前に現れる人々は皆、今の傷つきを抱え、なすすべを失っている。「共に考えましょう」というのは、たやすいことではない。どれほどの経験を有していても、心痛めるクライアントと向きあうために、セラピストのたゆまぬ研鑽や努力が求められる。その経過で発見されたことを、言葉にして後進に伝えていくことは、指導者の責務であろう。初心の心理臨床家も、各々の独自の発見を丁寧にまとめて発信し、相互研鑽に繋げていく。

その一方で、歴史は受け継がれ、伝統は守られていくことが大切であるのは、言うまでもない。

2023年度は、私にとって大切な師を喪失した哀しみの年でもあった。乾吉佑先生が9月7日に、馬場禮子先生が翌日の9月8日にご逝去された。そして、2024年2月14日に前田重治先生が天寿を全うされた。心理臨床実践の黎明期を牽引してくださった先生方を失うことは、私たちにとって大きな悼みである。精神分析研究の馬場先生に向けた追悼文を依頼された私は、1985年に開催された日

本心理臨床学会第 4 回大会での事例研究発表を行った際に頂いた、馬場先生の言葉を思い出していた。指導者としての、力強く、若手を守り育てる言葉が今もここに響いている。馬場先生から頂いた学びを振り返る中、1966 年の精神分析研究に掲載された「シンポジウム」に辿りついた。「心理テストと精神分析学」と題したシンポジウムでは、座長として金子仁郎、発言者として、片口安史、馬場禮子（当時表記は礼子）、辻悟、丸井文男が並び、指定討論者には、河合隼雄、霜山徳爾というメンバーである。まさに精神分析だけではなく、心理アセスメントの発展に大きく寄与された先生方の名前をみて、この論文を手にした私はまさしく心躍る思いであった。その後も馬場先生が登壇されたシンポジウムでは、心理療法家としてのアイデンティティの形成と変遷についてまとめられていた。2024 年 2 月 23 日に馬場禮子先生を偲ぶ会が開催され、そこに集う私たちの世代は皆、馬場先生から学んだことを受け継いでいく決意表明の会でもあった。

当センターの客員教授として、2022 年には、ウィリアム・アランソン・ホワイト研究所スーパーヴァイザーであり、サイモン・フレーザー大学教授である Roger Frie 先生をお招きすることが叶った。そして、Alexander Esterhuyzen 先生には、コロナ禍により 2021 年に客員教授の招聘が困難であったが、2023 年度に客員教授としての招聘が叶ったのは、当センターにとってコロナ禍を越えた証とも思える喜びであった。Alexander Esterhuyzen 先生は、国際箱庭療法学会のティーディングメンバーであり、ユング派の分析家であられるが、そのご挨拶からかつての河合隼雄名誉教授との交流が、今も先生のこのころの中で生きていたこととであった。私自身が、まさに歴史と伝統を受け継ぐ先生に、今の学生の指導のために来訪いただけたという感銘を抱いた時でもあった。

こうして、心理臨床の伝統は受け継がれ、新しい発見と共に今を生きている。

若松（2023）は、「人生の門」の中で、遠藤周作のいう「生活」と「人生」の 2 つの次元について述べた上で、どう生きるかだけではなく、自分が、自分以外のちからによって、どう生かされているのかを感じるとき、人生の門がゆっくりと開き始めるようにも思われるという。

心理臨床家として私たちが生きている「今」は、そうした歩みの中にある。人生を深める言葉を探す旅は、まだまだこれからも続く。先達らの思いを受け継ぐ私たちの使命は大きい。1 つの区切りとして、私は、2024 年度を通して、受け継いで来た歴史と共に、これまで見出してきた発見を伝えていきたい。当センターへも僅かながらの貢献となれば幸いに思う。

文 献

- 馬場禮子 (1996) 心理療法家アイデンティティの形成と変遷 シンポジウム 「精神分析家アイデンティティにおける訓練と理論と臨床経験」精神分析研究 40(3), 183-187.
金子仁郎・片口安史・馬場礼子・辻悟・丸井文男・河合隼雄・霜山徳爾 1966 シンポジウム「心理テストと精神分析学」精神分析研究 12 (5) ,1-12.
河合隼雄 2001 序 鏑幹八郎・滝口俊子編 スーパーヴィジョンを考える 誠信書房
若松英輔 2023 光であることば 小学館